

# 佐倉市高岡遺跡群出土の鉄器生産関連資料（1）

## －高岡大山遺跡における出土状況の検討－

神 野 信

### 1. 経緯

印旛沼に流下する高崎川の北岸台地上の高岡地区における宅地開発に伴って発掘調査された4遺跡を総称する高岡遺跡群は、弥生時代中期～平安時代を主体とした集落跡・墳墓からなる。本遺跡群が立地する台地は、高崎川を望む南端に平坦面をもち、その東・西側を解析谷によって奥深く浸食されたため、台地基部が狭い稜線となる。その南端の比較的広い平坦面に高岡大山遺跡、そこから後背の台地にのびる稜線上の狭い平坦面に高岡大福寺遺跡・谷津遺跡、後背の台地との接続点に高岡新山遺跡が所在する。このうち本稿では高岡大山遺跡における鉄器生産関連資料を取り上げる。

高岡大山遺跡は545棟の竪穴建物跡（弥生30・古墳129・奈良時代129・平安時代287）、223棟の掘立柱建物跡、約200基の土坑等の遺構が検出されている。弥生時代中期後半・後期前半、古墳時代初頭・中期と跛行的に集落が営まれるが、古墳時代後期以降平安時代末まで継続的に形成されるようになる。さらに古墳時代後期以降は遺構数の増加に加えて掘立柱建物跡がコ字状あるいはL字状に規則的に配置されることや、「神屋」「厨」等多数の墨書土器、帯飾具、緑釉・二彩陶器、銅鏡、隆平永寶等の銭貨などを伴うことが注目される。このような集落形成過程と特異な遺構配置や出土遺物などから本遺跡の性格については、郡衙など郡関連施設、郷長クラスの居住地、駅家、在地富裕の者の居宅などの可能性があげられているが、その中でも集落が古墳時代後期以降拡大していることに着目して、在地有力者の拠点が政治的・経済的に成長し、官的性格を兼ね備えていったと考えられている（阿部1998・加藤2004）。なお、本遺跡では「寺」など仏教寺院関連の墨書土器や銅鏡が出土することから、遺跡内に寺院が存在した可能性がある。ただし、その位置は特定されておらず、本遺跡の東約500mに所在する高岡廃寺との関係で捉えることができると指摘されている（阿部1998）。

さて、高岡大山遺跡では鍛冶炉跡など鉄器生産を行った場は検出されていないが、各時期の遺構内から

鉄滓等が出土していることは報告書に記述されていた。しかし、その具体的様相は明らかではなく、本遺跡の形成過程、性格にどうかかわるのか評価できていない。特に本遺跡が最も発展する古墳時代終末期～平安時代には印旛沼東岸台地の深奥部で鉄製錬が行われており、その生産主体・製品形状・流通消費のあり方の解明が課題となっている。

高岡大山遺跡における鉄器生産は、在地有力者層と官的性格が鉄器生産・鉄生産及びその流通・消費に果たした役割を明らかにするうえで重要な位置を占めると考える。本稿ではその解明のための基礎資料とすべく、本遺跡の鉄器生産関連資料を紹介するとともに若干の評価を加えたい。

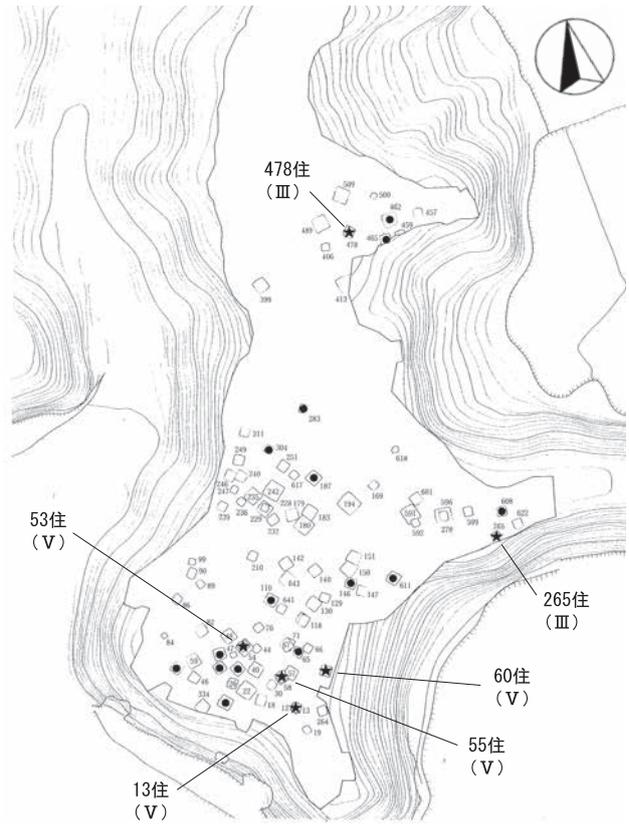
### 2. 鉄器生産関連資料の出土状況

#### （1）資料提示の視点

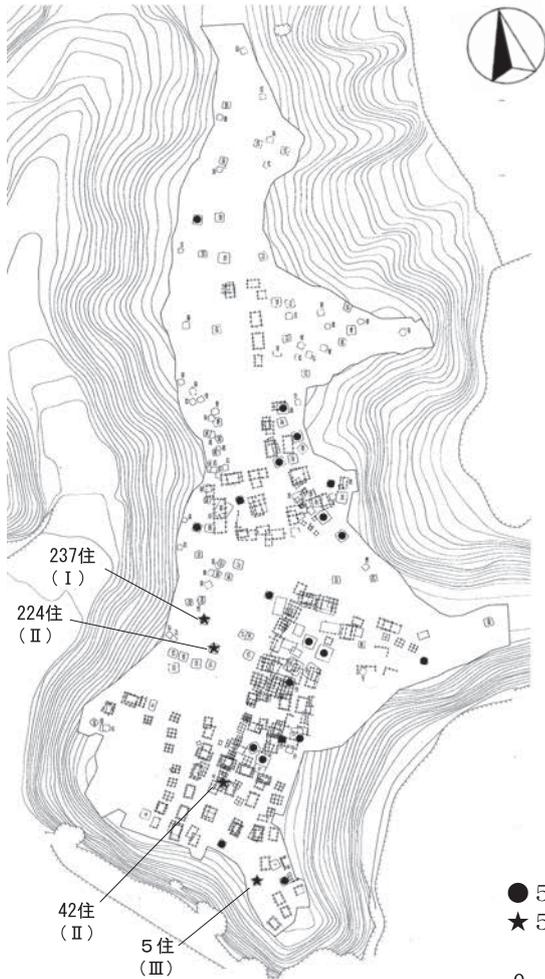
高岡大山遺跡では前述のように鍛冶炉跡などは検出されておらず、鉄器生産を行った場所はまったくわからない。ただ竪穴建物跡・土坑の覆土、掘立柱建物跡の柱穴から鉄滓・羽口片・溶解ガラス化粘土塊（炉壁）・鍛造剥片結合塊が出土しているだけである。このような遺物が遺構覆土からまとまって出土した場合、まずはその遺構の所属時期以降、遺構埋没過程の時間幅の中で生成されたものの可能性が高いと考えることが原則であろう。ただし、本遺跡では計画的に施設が造営されたとみられ、それに伴って地盤造成・整地が行われた可能性があり、出土遺構の時期以前のものまとまって混入するパターンも考えられる。しかし、生産遺構が未確認、出土資料の所属時期の時間幅が絞り込めないということで、本遺跡における鉄器生産へのアプローチを断念するわけにはいかないだろう。そこでこのような制約・限界があることを承知しつつ、本稿では鉄器生産関連資料の本遺跡内における時間的・空間的なその在り方の傾向を捉え、遺跡形成過程と重ね合わせることで、いつ・どこで・どのような規模の鉄器生産が行われたか推測する手がかりを得ようと思う（表1・2、図1）。



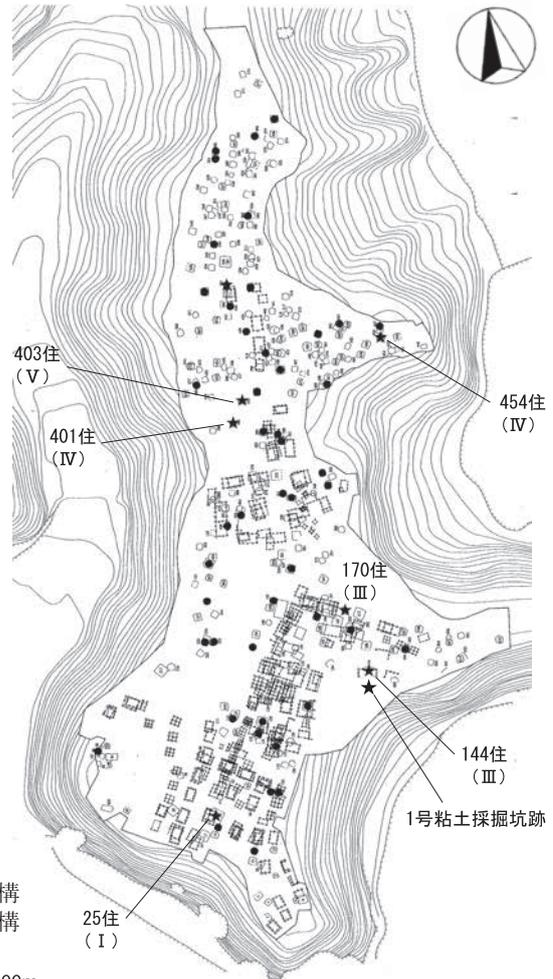
古墳時代前期



古墳時代後期～終末期



奈良時代



平安時代

- 5点未満出土遺構
- ★ 5点以上出土遺構



第1図 高岡大山遺跡時期別出土遺構位置図

なお、本稿では古墳時代後半以降の遺跡形成過程を加藤貴之による段階区分に基づくこととする。それによると古墳Ⅰ期＝古墳時代中期前半、古墳Ⅱ期＝古墳時代中期後半、古墳Ⅲ期＝古墳時代後期後半（6世紀後半）、古墳Ⅳ期＝7世紀前半、古墳Ⅴ期＝古墳7世紀後半、奈良Ⅰ期＝8世紀前葉、奈良Ⅱ期＝8世紀中葉、奈良Ⅲ期＝8世紀後葉、平安Ⅰ期＝9世紀前葉、平安Ⅱ期＝9世紀中葉、平安Ⅲ期＝9世紀後葉、平安Ⅳ期＝10世紀前半、平安Ⅴ期＝10世紀後半、平安Ⅵ期＝11世紀となる（加藤2004）。加藤の古墳Ⅳ・Ⅴ期を古墳時代終末期・飛鳥時代とするかは立場が分かれるところであり、筆者は後者をとるところであるが、本稿で加藤の区分を用いる以上、古墳時代終末期としての「古墳Ⅳ期」「古墳Ⅴ期」の区分名称を尊重してここで用いることとする。

## （2）古墳時代前期以前の様相

高岡大山遺跡では、継続的・発展的に遺跡が形成されはじめる古墳時代後半以前の遺構からも鉄器生産関連資料が出土する。弥生時代後期に台地南半平坦面の西寄りと中央平坦面の東寄りに竪穴建物跡群が検出されており、古墳時代前期にはその台地南半平坦面の西寄りに不整形円周溝による区画が現われ、それより北の台地上中心部に竪穴建物跡群が展開するほか、東寄りの縁辺で方墳（周溝）が営まれる。この中で弥生時代後期の竪穴建物跡2棟から4点167g、古墳時代前期の12棟から15点291gの鉄滓が出土している。弥生時代後期の108号住居からは3点出土しているが、古墳時代前期では特に集中して出土する遺構は認められない。なお、古墳時代前期には軽石様の白灰色の発泡多孔質滓が3遺構から3点30g出土しているが、これについては後述する。

## （3）古墳時代後期～終末期の様相

古墳Ⅰ期は竪穴建物跡が台地南半平坦面の西寄りに6棟からなる小規模な竪穴建物跡群が検出され、古墳Ⅱ期になると台地南半平坦面の全域に竪穴建物跡が広がる。古墳Ⅲ期には竪穴建物跡群が台地南半平坦面の東縁辺に沿って展開するとともに台地中央平坦面の東寄りにも竪穴建物跡群が検出されており、この2群からなる遺構配置の在り方は古墳Ⅳ・Ⅴ期以降、基本的に継承されていく。

鉄器生産関連資料については、古墳Ⅰ期に出土遺構は認められない。古墳Ⅱ期は竪穴建物跡4棟から5点

219g出土しており、これらはまとまることなく散在しているが、台地南半の竪穴建物跡群の北縁と南縁に位置する遺構から出土する傾向がみられる。古墳Ⅲ期は竪穴建物跡5棟から16点422g出土するが、台地南半の遺構群北縁に位置する265号住居で4点117g、台地中央の遺構群に位置する478号住居で6点136gと、集中して出土する遺構が認められるようになる。しかし、古墳Ⅳ期になると4点89gと再び出土点数が減少、散在して出土する。それが古墳Ⅴ期になると竪穴建物跡9棟から51点1,581gと数量的に急増するだけでなく、特定遺構で集中的に出土しており、その中でも13号住居跡で滓4点290gと羽口片3点、53号住居跡で滓4点236gと羽口片2点、55号住居跡で8点176g、60号住居跡では39点707gが出土しており、いずれも台地南半平坦面の遺構群の南縁辺付近に位置している。

## （4）奈良～平安時代の様相

奈良Ⅰ期は台地南半から中央にかけての平坦面東寄りを中心に遺構が展開し、当該段階に掘立柱建物が出現したとみられる。この掘立柱建物跡は台地南で2間×2間が南北に直線的に並び、その北端では側柱・総柱建物跡が検出されているなど、この段階で計画的な施設配置をとるようになったと推察される。奈良Ⅱ期以降は台地南半の掘立柱建物跡群の拡充が進み、平安Ⅰ期にそれが最も発展したと考えられる。その平安Ⅰ期には台地中央の平坦部に掘立柱建物跡が現われ、平安Ⅱ期に側柱建物跡がロ字形に囲む掘立柱建物跡群を形成しはじめ、台地基部まで竪穴建物跡が展開するようになるのに対し、台地南半の掘立柱建物跡群は縮小し、その配置も計画性が緩むように見受けられる。そして平安Ⅳ・Ⅴ期には台地南半で数棟の掘立柱建物跡を残して姿を消していき、平安Ⅵ期には小規模な竪穴建物跡が台地平坦面全域に散在する景観を経て終焉を迎える。

奈良Ⅰ期以降の鉄器生産関連資料は、全ての段階の遺構から出土しており、その中でも奈良Ⅱ期の26点1,234g、奈良Ⅲ期の31点734g、平安Ⅱ期の40点729gと相対的に多く出土する段階がある。また、各時期に集中して出土する遺構が認められる。奈良Ⅰ期には台地南半の掘立柱建物跡群の西に位置する237号住居跡で5点183g、奈良Ⅱ期には同じ掘立柱建物跡群の南端の42号住居跡で5点60gと羽口片2点、西側外縁の224号住居で5点135g、奈良Ⅲ期には台地平坦部南端の5号住居跡で16点419gと羽口片2点が出土して

表1 高岡大山遺跡時期別遺構出土鉄滓（1）

	長軸長										厚さ					計
	~2cm	~3cm	~4cm	~5cm	~6cm	~7cm	~8cm	~9cm	~10cm	10.1cm~	~2cm	~3cm	~4cm	~5cm	5.1cm~	
弥生時代後期竪穴建物跡（全2棟）																
炉内滓				2 36		2 131					3 136	1 31				4 167
古墳時代前期竪穴建物跡（全12棟）																
炉内滓	1 8	1 1	7 109	2 56	2 39						12 177	1 26				13 213
含鉄滓			1 30	1 48								2 78				2 78
古墳Ⅱ期竪穴建物跡（全4棟）																
炉内滓		1 6	1 15	1 26		1 118					3 47		1 118			4 165
含鉄滓					1 54						1 54					1 54
古墳Ⅲ期竪穴建物跡（全5棟）																
炉内滓		2 19	1 18	5 168	1 21		1 60				4 73	6 213				10 286
含鉄滓	2 13	3 23			1 100						4 26	1 10	1 100			6 136
古墳Ⅳ期竪穴建物跡（全4棟）																
含鉄滓		1 11	1 42	1 12							3 65					3 65
炉内滓			1 24									1 24				1 24
古墳Ⅴ期竪穴建物跡（全8棟）																
炉内滓	1 4	9 100	10 190	5 204	4 223	4 299	1 114	1 145			23 533	11 632	1 114			35 1,279
含鉄滓		4 41	1 14	5 202							5 55	5 202				10 257
黒ガラス		3 15	3 30								6 45					6 45
奈良Ⅰ期竪穴建物跡（全7棟）																
炉内滓	2 4	2 22	1 37	1 39	2 123	1 117					3 13	6 329				9 342
含鉄滓		2 26									2 26					2 26
奈良Ⅱ期竪穴建物跡（全10棟）																
炉内滓	3 25	4 50	2 64	1 39	2 147				1 245	1 233	7 132	6 553		1 118		14 803
含鉄滓	1 4	3 27	4 135	1 25		1 213					6 99	1 16	3 289			10 404
黒ガラス		1 8					1 50				2 58					2 58
奈良Ⅲ期竪穴建物跡（全9棟）																
炉内滓	1 5	5 39	11 140	3 104	3 171	1 12	1 115	1 80			17 295	7 201		2 170		26 666
含鉄滓	3 34			1 27							4 61					4 61
炉壁		1 7									1 7					1 7
平安Ⅰ期竪穴建物跡（全4棟）																
炉内滓		2 14	1 36	1 41	1 48						3 62	2 77				5 139
含鉄滓			1 44	1 37	1 44						1 44	2 81				3 125
平安Ⅱ期竪穴建物跡（全20棟）																
炉内滓	7 18	8 63	5 94	3 111	1 52						20 168	1 43	3 127			24 338
含鉄滓	3 9		5 126	1 39		1 91	1 92				7 120	4 237				11 357
炉壁	2 2		2 17		1 15						5 34					5 34
平安Ⅲ期竪穴建物跡（全12棟）																
炉内滓	1 4	6 37	3 31	4 94	4 274		1 88				11 121	6 308	2 99			19 528
含鉄滓			1 44		3 173		1 166				1 13	1 40	3 330			5 383
炉壁			1 7	1 12							2 19					2 19

※上段：点数、下段：重量（g）

表2 高岡大山遺跡時期別遺構出土鉄滓(2)

	長軸長										厚さ					計
	~2cm	~3cm	~4cm	~5cm	~6cm	~7cm	~8cm	~9cm	~10cm	10.1cm~	~2cm	~3cm	~4cm	~5cm	5.1cm~	
平安Ⅳ期竪穴建物跡(全7棟)																
炉内滓		2 12	4 65		1 37	2 174	1 83		1 154		6 77	4 314	1 134			11 525
含鉄滓							1 92				1 92					1 92
平安Ⅴ期竪穴建物跡(全9棟)																
炉内滓	6 6	8 61	2 48	1 26	1 68			1 166			16 155	3 220				19 375
含鉄滓	1 1		1 23	1 67	3 161	1 71	1 111				2 72	5 295	1 67			8 434
炉壁							1 250		1 115			1 115		1 250		2 365
平安Ⅵ期竪穴建物跡(全6棟)																
炉内滓	3 13	1 3	1 4	3 84			1 181				7 66		2 219			9 285
含鉄滓			1 24									1 24				1 24
時期不明竪穴建物跡																
炉内滓	2 2			1 47	1 37	1 40					2 2	3 124				5 126
含鉄滓				1 36			1 96				1 36	1 96				2 132
奈良Ⅱ期掘立柱建物跡(全3棟)																
炉内滓		2 12	4 89	2 75							6 110	2 66				8 176
含鉄滓			1 19		1 48						2 67					2 67
奈良Ⅲ期掘立柱建物跡(全5棟)																
炉内滓		1 8	2 58								2 31	1 35				3 66
含鉄滓			1 32	1 54								2 86				2 86
平安Ⅰ期掘立柱建物跡(全1棟)																
炉内滓				1 33							1 33					1 33
平安Ⅱ期掘立柱建物跡(全3棟)																
炉内滓			2 34								1 14	1 20				2 34
含鉄滓						1 119						1 119				1 119
平安Ⅲ期掘立柱建物跡(全3棟)																
炉内滓		3 29	1 7								4 36					4 36
平安Ⅴ期掘立柱建物跡(全2棟)																
炉内滓	1 3					1 73					1 3	1 73				2 76
含鉄滓	1 8										1 8					1 8
1号粘土採掘坑(古墳時代終末期~奈良時代前半?)																
炉内滓	30 73	6 54	6 113	3 82	1 26	1 122		1 187		1 503	42 237	5 233			2 690	49 1160
含鉄滓	2 5	2 13		1 33							4 18	1 33				5 51
出土地不明1																
炉内滓	1 1	2 2	5 54	1 15	3 93	1 114	2 178				11 160	3 187	1 110			15 457
出土地不明2																
炉内滓	1 5	21 96	17 215	9 232	3 102		1 71		1 195	1 265	44 508	9 602	1 71			54 1181
含鉄滓		2 15									2 15					2 15
炉壁	1 3										1 3					1 3

※上段：点数、下段：重量(g)

いる。なお、台地南東端縁辺の斜面は大きく削られ、粘土採掘坑跡2か所が検出されている。このうち奈良時代後半以降の遺構に切られる1号粘土採掘坑内の土

坑から54点1,211gと多数の鉄滓等が出土している。

平安Ⅰ期は、台地南半の掘立柱建物跡群の南端にある25号住居で5点132g、平安Ⅱ期には炉壁片を含む

18点65gが出土した454号住居跡のように台地中央部で多数出土遺構が現れる。平安Ⅲ期には台地南半平坦部の東縁にある144号住居跡で4点184gと羽口片2点、掘立柱建物跡群の北端に位置する170号住居跡で5点227g。台地中央の平安Ⅳ期401号住居跡で5点71g、それに隣接する平安Ⅴ期の403号住居跡で8点391g、台地中央部掘立柱建物跡群の北端にある527号住居跡で微小な鉄滓ながら5点8gが出土している。掘立柱建物跡群が縮小するとみられる平安Ⅳ期以降は、台地北半の竪穴建物跡まで鉄器生産関連遺物が広範囲に散在して出土している。

以上のように遺跡全体で鉄器生産関連資料が散在して出土するものの古墳Ⅴ期以降は集中して出土する遺構が認められ、特に出土数量が増加する段階ではそれが複数になるなど、全段階を通じて一貫して共通した在り方・傾向をみせているといえよう。

続いて鉄器生産関連資料のサイズ・重量の構成から読み解いてみたい。ここでは炉の内部に溜まった滓(炉内滓)、表面に酸化鉄が付着あるいは内部の鉄塊が酸化膨張して表面にヒビが入る含鉄滓、炉壁あるいは羽口先端が溶解したとみられる黒色ガラス質滓、スサ入り粘土の表面が黒色ガラス化した炉壁片を計測対象とした。これらには破片資料が多く含まれ、完存品・破片を同等に計測しているが、長軸長・厚さに関してはある程度実態を反映した傾向をみせているものと考えている。

それによるとほぼ全段階で長軸4cm以下、厚さ3cm以下特に2cm以下が主体を占めている。出土数量が増加する古墳Ⅴ期以降は長軸5cmを越える個体が増えていき、奈良Ⅱ・Ⅲ期には10cm以上の個体が含まれるなど相対的に大形に偏る傾向が窺えるほか、出土数量では減少していく平安Ⅲ期以降も大きく重い個体が含まれている点は注目されよう。

含鉄滓は各段階で出土しており、滓が多数出土する段階の個体数比は古墳Ⅴ期12%、奈良Ⅱ期8%、奈良Ⅲ期3%、平安Ⅱ期13%と10%前後を占める。また、黒色ガラス質滓は古墳Ⅴ期から認められるが、明確な炉壁片は平安Ⅲ期以降出土している。

なお、本稿では出土地「不明1」「不明2」の資料を取り上げている。これらについては全く情報がなく、通常ならば今回の資料から除外すべきかもしれないが、あえてここに提示した理由については後述したい。

### 3. 小結

ここまで高岡大山遺跡における各段階の遺構出土鉄滓の位置、数量、サイズ構成を検討し、本遺跡の傾向を捉えてみた。出土遺構の時期がその鉄器生産関連資料の時期とは限らないものの、古墳時代終末期・奈良時代後半にピークをもちながらも基本的に全段階を通して共通した在り方をみせていることが確認できたと思う。

①弥生時代後期から出土しているが、定量的・継続的に出土するようになるのは古墳Ⅲ期以降である。

②定量的・継続的に出土するようになると、まとまった数量が出土する遺構が認められるようになる。

③出土数量が増加する段階は、まとめて出土する遺構数が増える。

④炉内滓等鉄滓のサイズは全時期を通じて類似するが、平安Ⅲ期以降は相対的に大きく重いものに偏る傾向をみせる。

今回は鉄器生産関連資料のうち鉄滓に焦点を当て、その具体的な特徴から高岡大山遺跡でどのような鉄器生産が行われていたのかを知るための手がかりを探ってみたい。

### 引用・参考文献

- 阿部寿彦1998「高岡遺跡群」『千葉県歴史-資料編考古3奈良・平安時代』千葉県
- 加藤貴之2004「高岡遺跡群の再検討」『印旛郡市文化財センター研究紀要』4 財団法人印旛郡市文化財センター
- 阿部寿彦・宮内勝巳ほか1993『高岡遺跡群Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』財団法人印旛郡市文化財センター